

# 都市祭礼の復興

## —西宮まつりにおける渡御祭の変遷—

小林 哲也

### I. 本稿の目的

本稿では、従来の都市祭礼研究で行なわれてこなかった災害と祭礼というテーマについて、西宮神社の神事「西宮まつり」の渡御祭を事例としてとりあげることで、都市社会の復興によって移り変わり、発展していく祭礼について考察する。

調査は、この「西宮まつり」の渡御祭に参加しての参与観察<sup>1)</sup>を主軸とし、氏子地域で神輿の参加者を募る活動をしているN氏（50歳代）らへのインタビューを行なった。この西宮神社周囲には、安井、浜脇、香櫨園、用海の4つの氏子地域<sup>2)</sup>が存在している。N氏は安井地区に3代住み続ける氏子世話役であり、仕事柄<sup>3)</sup>地域の顔役でもある。

#### 1. 先行研究

都市祭礼についての研究は柳田国男や米山俊直、松平誠らによる歴史がある。しかし、災害と既存の都市祭礼との関係をメインテーマとしたものは、阪神・淡路大震災で被災した地、北淡町で行なわれている室津八幡神社の秋祭りをとりあつかった、松浦和幸らの研究〔松浦 2001〕しか存在していないのが現状である。この研究は確かに震災とまつり、この2つの関連性を調査したものであるし、震災による変容も報告の中に1例含まれてもいるのだが、この研究の本義は、震災で被災した人々が負った心の傷を癒すものの1つとしてまつりを取り上げたのであって、まつりや祭礼の研究として議論されたものではない。

そこでまずは、渡御祭に関する祭礼研究を見ることによって、祭礼の変

容について考えていこうと思う。

小笠原尚宏は、神輿渡御が原型となるまつりが、山車の登場によって祭礼化し、次第に山車中心となっていくまつり全体について、変遷を追ってその動き、そして原因を追究している〔小笠原 2005〕。神輿と山車の両者を共存させようという事例であるが、まつりの日程と担ぎ手の確保に関する問題点を指摘し、後者について新しい組織の発足や、資金的な運用の例を挙げている。

宇野功一は、まつりのにぎわいとして作られた山車が、神輿とは異なる巡行をすることによって、日程の延長「日延べ」がおこり、本来とは外れた巡行の形態を作っていた背景、特に神輿渡御のスタイルと、山車を巡行する人々との意見の食い違いを事例として挙げている。京都の祇園祭における神輿と山鉦の関係を受けて行なわれた研究であるが、神社の神事と、まつりに参加する人々との、祭礼に対する想いが異なるということが、結果として「革新と伝統を二つながらに巧みに実現」することができた、としている〔宇野 2005：127〕。

どちらの事例でも、時代の変化や社会構造、まつり参加者の移り変わりによってまつりそのもの、あるいは祭事のメインである渡御祭が変容をみせる様を描いている。時代や社会背景によってまつりが変化する一例といえるであろう。本稿ではこのように祭礼が変容する事例として、災害によって変容することとなった西宮神社の「西宮まつり」と、その渡御祭を見ていくことにする。

## II. 西宮市と西宮神社の災害

兵庫県西宮市といえば、灘の酒造地帯<sup>4)</sup>としてや、いわゆる阪神地域のベッドタウンとしても知られている。市名の由来は本稿の題材でもある西宮神社にあり<sup>5)</sup>、歴史的には西宮神社が建造されたとされる平安期にまでさかのぼり、その門前町として栄えてきたという。江戸期までは尼崎藩の一部であり、西国街道と中国街道が交わる宿場町という重要な地点であった。明治維新により西宮町になり、1925年には市政を施行し西宮市と

なり、現在の市域となるのは第2次世界大戦後の1951年になる。古くから街道沿いの町でもある反面、一般には酒造地帯としても有名である。室町期には酒造が行なわれていたが、発展をしたのは江戸時代中期頃からで、当時、西宮神社の周囲から良質の地下水が採れることが分かり、これを宮水と呼んで用いたことによるという。

このような立地・特色を持つ町であり、海に近く、またかつては湾になっていたことから、水害による被害が多かった。しかし、それらを上回る被害として、第2次世界大戦時の爆撃と、1995年の阪神・淡路大震災によるものがある。そして本題となる西宮神社とその神事への影響については、現在確認されている中では、地理的な水害よりも、これら近年の災害による被害の方が大きいという。

## 1. 戦争による被害

第2次世界大戦末期における日本への空襲は、西宮に対しても行なわれた。1945年5月から5回に渡って被害を受けたが、いわゆる神戸空襲と同時期にあたる8月5日に本格的な爆撃を受け、市内全域が壊滅するに至った。

『西宮市史 第3巻』の被害統計によると、当時の市域の18%以上が戦災に焼かれたという。戦時中から阪神地域一帯は工業地帯として開発が進められていたので、主にそれら工場の集中する南部を狙った爆撃であったが、西宮市の中心として栄えた市場などもその南部に集中していたため、酒造地帯や経済、交通にも大きな被害がもたらされた。

## 2. 阪神・淡路大震災と西宮

1995年1月17日におきた阪神・淡路大震災は、神戸・阪神間に人的・経済的大ダメージをもたらし、阪神の主要都市である西宮市においてもその被害は大きなものであった。私も神戸で被災した者なので、神戸のそれの方を鮮明に記憶しているのであるが、西宮においても、死者1126名、負傷者6386名、また全壊・半壊家屋は3万棟を超え、火災による全焼は50棟にものぼっている。規模で言えば、神戸に次ぐ被害であった〔西宮市 2002〕。42万人だった人口は、95年以降39万人を下回るまでに流出した。その後次

第に増加していき、2006年には47万人に達している。

また、経済や西宮南部一帯の工業地に関する被害も多く、事業所は2年間で150以上減り、1907名の従業員が去っている〔山下 2000：398〕。市の財政にも、被害とそれら税収源の減少は大きく押し掛かり、かねてからバブル崩壊によって悪化していた財政を立て直すため、震災後に3度の行財政改善実施計画を行ったという。

### 3. 西宮神社

「西宮まつり」の渡御祭は西宮神社の神事である。そして、この西宮神社の建立と歴史に大きな関わりのある祭事でもある。西宮神社の建立や発祥については、広田神社<sup>6)</sup>との関連があり、記録としては平安時代にまで遡ることになる。西宮神社の歴史や祭神に関しては、今まで成されてきた業績が多数あるため、ここでは渡御祭に関係のある古伝承を簡単に紹介しよう。西宮神社でのえびす神の由来については諸説存在しているが、民間伝承として信じられ、また今日では西宮神社当社も公認としている逸話である。

昔、鳴尾の沖合<sup>7)</sup>で漁をしていた漁師が網を上げると、1体の神像が引っかかっていた。その時は気にも止めずに海へ戻したのであったが、今度は和田の岬に行って漁を続けると、また同じ神像が引き上げられた。これはただごとではないと思い、漁師は鳴尾にある自分の村で祀ることにした。しかし、その神像がここではなくもう少し西に祀ってほしいと言い出したので、お渡りをして、現在西宮神社のある場所に社を立てて建立するに至った〔西宮神社 2003〕。

この時流れ着いた神像は、イザナギとイザナミによって葦船に乗せ流された蛭子であるという後の解釈から、えびす神として祀るようになり、えべっさん<sup>8)</sup>というイメージの元になったという。

また、この古伝承には余談があり、鳴尾から西へ向かっている最中に神輿の中で居眠りを始めたえびす神を、お供の者がその尻をつねって起こし

たのだという。このことを起源とした「おこしや祭」というものが毎年6月14日に行われている<sup>9)</sup>。

#### 4. 西宮神社と近年の災害

1945年8月5日、西宮市全土を襲った空襲は西宮神社にも降りかかった。境内にはのべ300発に上る焼夷弾が落とされ、神社職員と付近にいた駐屯部隊によって国宝（現在は重要文化財）の表大門と大練塀は一部損傷に留められたが、それらを除く境内のほぼ全てが壊滅してしまった。当時、日本全国の国宝建造物に指定された社殿の中で被災したのは8社であり、近畿地方では唯一の被災した国宝であるという。

復興にあたってはまず、1949年に氏子崇敬者が協賛し、復興奉賛会が発足された。そして1950年から復興が本格的に開始され、1952年に大練塀の修復が完了し、1956年に本殿の着工が開始され、1962年に再建が果たされた。この西宮神社復興では、文化財保護法などの行政的支援を受けずとも、大練塀を除いた本殿などの建造物を被災前と変わらない姿に復元することができたという〔西宮神社復興奉賛会 1962〕。

また、戦災から50年後、阪神・淡路大震災によっても西宮神社は大きな被害を受けることになった。主な被害では、本殿の柱が歪んだことで本殿全体が傾き、社務所が全壊し、戦災から免れた大練塀もついに倒壊し、表大門前にあった大鳥居が崩れたことなどが挙げられる。

復興にあたっては、境内北東の西宮神社会館を避難所として開放しながら行なわれた。社務所は「ハイテク社務所」と言われるほどに生まれ変わり〔読売新聞 1998.11.7〕、大練塀の修復ではかつて同様の再建をした際の古銭が出てくるなどの珍事もあった〔朝日新聞 1996.3.19〕。また、大鳥居修復は費用などの面で後回しにされてきたが、2006年に寄付されて元の姿に戻った〔朝日新聞 2006.12.15〕。

### Ⅲ. 「西宮まつり」と渡御祭の復興

例年9月の21日から23日にかけて、西宮神社では大例祭がとり行われる。

現在ではその全日か、あるいは最終日にあたる23日を「西宮まつり」と呼び、市民や氏子から親しまれている。元々は西宮神社において例祭を行なうだけのものではあったが、次第に市民らがそれに合わせるかのように催し物を増やし、今のかたちになっていった。

「西宮まつり」の主な行事には、22日の地域町内のこども会による子供神輿や、浜脇中学校のプラスバンド演奏、商店街ステージでのイベント、露店の出店などがあり、特にこの露店には市内の大学からも模擬店のようなものが近年参加を始め、地域色を増しつつある。また、最近ではまつりの3日間を通して、西宮神社の氏子組織である若戎会が連日だんじりを氏子地域内に巡行させている。

そして、締めとなる23日に渡御祭が行なわれて、行事を終了する。この渡御祭の祭事的な最大の意味合いは、神幸祭事として、えびす神に里帰りをさせる、というものである。前述したように、この西宮神社にはえびす神の鎮座伝承が伝えられているが、その伝承に従い、えびす神発祥の地とされる現在の神戸市長田区にある和田岬、そして和田神社まで、神輿を船でお渡しさせるのである。これ自体を「産宮参り」というが、この本義である船を用いた「海渡御」を含め、神輿行列である「陸渡御」、その2つの橋渡しになる「御旅所祭」などの行程によって、この渡御祭は成り立っている。

渡御祭の起源は不明だが、歴史は大変古く、西宮神社の創建が平安時代頃とされているため、源流はそこにあることが推測される。現在確認されている中では国宝である鎌倉期の一遍上人絵伝の中に記述がある他、祭事全般を描いた貴重な資料として、「陸渡御」では寛文3年（1663年）の『和田崎神幸之図』<sup>10)</sup>、「海渡御」では江戸時代中期の『西宮大神宮本紀』といったものも存在している。

しかし、江戸期から今日に至るまでの資料は存在しておらず、なによりもこの例祭自体が行なわれていなかった。16世紀半ば、織田信長の時代に社領没収が行なわれ、まつりの規模を縮小せざるをえないという状況があったのである。

そして近年においては、第2次世界大戦による戦災と、1995年の阪神淡

路大震災の前後を通して変化が見られる。それらの比較をすることで、この祭礼全体がどのような影響を受けたのか、また復興する過程において、例祭である渡御がどのような発展をしていったのかを見ていこうと思う。

## 1. 戦後復興

戦災によって、西宮神社はかつてない壊滅的状况にまで陥った。そこから復興していく過程の中で、渡御祭も400年近い時を経て復活することになる。現在の「西宮まつり」と渡御祭を考える上での比較として、また今につながる発展の経緯として、復活の第1歩となる過去の「西宮まつり」を見ていく。

そもそもこの渡御祭を含めた例祭が行なわれるきっかけとなったのは、戦災から神社や地域が復興するにあたり、1953年の10月15日に「西宮まつり」という名のまつり行事が市内において行なわれたことによるという。そこから端を発して、戦前から途絶えていた由緒ある西宮神社の御例祭を復活させる、というかたちで再開され、とり行われることになったのである。

ただ、和田岬までの巡行を含めた渡御祭そのものを再興させることは、当時の状況下では難しかった。西宮神社としても古い文献を元に、残されていた神輿を修復するところから始めなければならず、神輿による「陸渡御」のみを復活させるにとどまったのである〔西宮神社復興奉賛会 1962〕。

こうした経緯で、渡御祭は1954年に、神輿と行列という陸上での渡御をほぼ完成させたかたちで始められ、毎年行なわれることとなった。当初は神社の例祭ということで、この陸渡御の巡行が行なわれるだけであったが、次第に市民らから西宮神社の秋まつりとして認識され、1970年からは宵宮の9月21日に若戎会が自分たちで作っただんじりを走らせたり、各氏子地区の町内らが生子供みこしを出したりする中で、1981年に9月21日と22日の両日を合わせたものとして「西宮中央市民まつり」という名称が付けられた。

この前後のまつりからは、9月22日の例祭には渡御祭が行なわれ、21日の宵宮には市民らと若戎会による宵まつりが行なわれるということになっ

ていた。宵まつりでは、若戎会のだんじりを中心に、地域のこども会によるこども神輿、稚児行列などが主に行なわれ、浜脇中学校のブラスバンド演奏や奉納芸能大会といった各種のイベントも、同時に開催されていた。

ただこの名前については、1986年、西宮球場で開かれていた「西宮市民まつり」との混同を避けるため「西宮えびすまつり」と変更されている。そしてそれが震災後は「西宮まつり」と短縮されることになった。

また、1988年から震災の翌1996年までの8年間は、22日には「宮水まつり」もとり行われていた。これは、江戸時代より灘五郷の1つとして親しまれている酒造地帯の酒造りの源流ともなっている西宮の宮水<sup>11)</sup>を祭った祭事である<sup>12)</sup>。

神輿渡御は、神輿と行列というかたちが再興当初から確立されていた。4つの氏子地域を順番に4年に1度回っていたということであるが、1962年から1986年までは車による巡行を行っていた。1987年に徒歩での渡御に戻されたが、この時の担ぎ手などは、地域の世話役が中心となり、各地域の体振（体育振興会）などが担っていた。若戎会のメンバーらと、氏子の中で守り役となっている方が中心となって行列を成し、朝方に神社を出発した後、その年に担当となっている氏子地域まで練り歩き、そして氏子地域に入った辺りの場所で、その地域の世話役らが神輿担ぎを代わり、御旅所までは彼らが担いでいった、ということである。そして御旅所で昼を済ませ、一休みした後再度地域の人々が同じように氏子地域から外まで担ぎ、そこからは行列のメンバーに神輿を託して見送っていたという。

このように、この時点で地域の氏子ら住民が参加するという形態になってはいたが、N氏や安井地区の方々から聞いた限りでは、9月22日の例祭が「氏子のまつり」であるという意識を住民が持っていたということではないらしい。そのあたりのことを、N氏からは以下のように聞いている。

「お神輿を担いだ渡御っていうのは、あまり見たことなかった。で、宗教性が強ければ、地域の方はやっぱり参加しません。そんな気持ちでぼくらの時代になって、なんか、えびすさんが、というんじゃなくて、おまつりが、市民のまつりのような感じになってきたなというの



が雰囲気、みんなが参加し始めた。なんか選ばれた人が、出て行って並んで行く、という感じじゃなくて、みんなで作る、というおまつりになって。

ぼくも小さい時、お稚児さんっていうのに参加したんですよ。その頃から、地域のえびすさんっていう形で、ずんずん定着してきたんじゃないかと」

また、西宮市のコミュニティ誌『宮っ子』の浜脇地域版である『ふる里はまわき』でのとりあげ方も、震災以前に発行されたものでは21日に偏っていることから、あくまでも地域住民にとって例祭は「神社のまつり」であり、「西宮えびすまつり」は宵まつりの方に重点が置かれていたように考えられる。

## 2. 阪神淡路大震災からの復興

1995年の阪神・淡路大震災では、Ⅱ章で見たように西宮市、西宮神社ともに未曾有の地震被害を受け、またもや基盤が傾くことになった。「西宮えびすまつり」も中断を余儀なくされたのであったが、再度の復興を果たし現在も生き続けている。しかし、それはまた震災以前のまつりとは様相の異なるものとなっている。どのような変化をしたのだろうか。

震災後5年間は、神社による例祭と渡御が中断されることになり、「西宮えびすまつり」も行なわれていなかった。そして震災復興が一段落ついた頃合をみて、2000年から復活させることになったのであるが、単に震災以前の渡御祭を立て直すに止まらなかった。渡御祭を元のかたちに戻したいという神社の意向と、まつりを盛大にしていきたいという「西宮まつり実行委員会」からの意見により、神輿巡行による「陸渡御」だけでなく、本来の神幸祭事である「海渡御」をも再興させていくことになったのである。

同時に、まつり全体の名称も「西宮まつり」へと変わり、21日の宵宮と22日の例祭に加え、23日に渡御祭を行なうということで、期間が3日間となった。

「海渡御」が再開されたのは2000年。「産宮参り」として神社関係者（宮司や禰宜）とその年の担当地区の氏子数名を乗せた一部の船が和田岬にまで向かうことになるのは、翌々年の2002年になってからである。

この400年ぶりとなる「海渡御」を再興させ、渡御祭を古来の姿にまで復活させたことが震災後の一番の変化である。しかし、運営面では「陸渡御」での担ぎ手の変化も重要である。

まずは2000年に「西宮まつり」を再興するにあたって、「陸渡御」の神輿巡行をするため、「西宮まつり実行委員会」のN氏を中心とし、氏子地域の安井地区で人員を募ることが始められた。地域のスポーツクラブ21<sup>13)</sup>のメンバーが主として参加することとなったといい、現在でも参加者数を伸ばしている。

また、2001年からは大手前大学をはじめ、関西学院大学と夙川短期大学の学生らも参加するようになった（写真1, 2）。これは当時えびす信仰の研究をしていた故・米山俊直大手前大学前学長<sup>14)</sup>が、西宮神社の前権宮司吉井貞俊に依頼され、教育の一環として学生をボランティア参加させることになったことがきっかけである。

そして、2004年からは地域と異文化交流の名のもとに、市内の西宮国際交流協会を通じて外国人が神輿担ぎに参加し始め、2005年に地域の小学生らによる童女神楽が登場し（写真3）、2006年には氏子地域への「陸渡御」が復活するなどして（写真4）、地域との関係性を考慮するようになりつつある。加えて、巡行の1つとして2005年にはギャル神輿が行なわれだし（写真5）、2006年には震災で途絶えていた布団御輿の「陸渡御」参加も再開されるなど（写真6）、神輿巡行のかたちや考え方にも動きがみられる。

全体では前でも触れたように、まつりの開催期間が3日間になったことで、宵宮の21日には若戎会のだんじりが走るだけで、かつて行なわれていた宵まつりのような市民のまつりは、翌22日になっている（写真7）。このだんじり巡行は1日限りではなく、この「西宮まつり」の間中走り続け、3日間で氏子地区のほとんどを巡っているような状態である（写真8）。

23日になる渡御祭の詳細は（図2）の日程にある通りであるが、こちらの終了時刻に合わせて、当日のだんじりは夜晩くに終了することになる。

これは、まつりをとり行った後の直会<sup>15)</sup>を行なう都合上で、渡御祭の直会が終了した頃にだんじりが終り、会場の入れ替えが行なわれているからである。

震災後の復興から最近までにおける「西宮まつり」の概要は以上のようなことであり、年表として整理すると、表1になる。

### 3. 渡御祭復興と地域

では、「陸渡御」巡行の変化はどのように変化したのか。また、どんな影響をまつり全体に与えているのだろうか。

復興にあたって最初に問題となったのは神輿の担ぎ手のことである。そのことに関して神社から依頼され担当することになった安井地区のN氏の語りを元に、実行委員会の行なったメンバー集めを見ていく。そして、現在は成功したと言える人員増加に伴う問題点などを述べるとともに、それを解決する担ぎ手の構成方法やギャル神輿の導入などを取り上げて、渡御祭のもつ問題と今後について考えていこうと思う。

N氏がこの「西宮まつり」に関わることとなったのは、震災以前の1989年に、安井地区に神輿巡行の順番が回ってきた時にはじまる。当時、地域内の神輿担ぎは力のある若手や体育振興会のメンバーが担っており、その体振の副会長であったN氏が担当になったことがきっかけだという。震災後の復興話が持ち上がった時に、その体育振興会が力を持ち、行動力を備えていたことから、以後も参加やその世話役にあたることになっていった。

このことにより、N氏は「西宮まつり実行委員会」の役員として活動することになったわけであるが、そのまつりに対する考えを、以下のように語っておられた。

「地域で渡御云々について全体の、宗教関係を除いて、おまつりっていうのを楽しくしようと、参加できるようにしたいっていう構想がある。で、最初は海渡御もなかったから、その渡御が出来るようにするとか、最高200人行列を最後にしてみたいなー、っていう。

それから今盛り上がってる宵宮、本宮ですか、盛り上がりが悪い

ところをなんとか今度、考えてくれんか、っていう話も出てきよんで。だから子どもの引けるダンジリをね、あれ用のダンジリ小さいのあるでしょ、だから、子どもの引けるダンジリを。それから布団神輿があるんですよ、古い。それを修理して、ギャルが担げて、女の子が参加できる神輿もしてあげたいな〜と」

この話を聞いたのは2004年のことであったが、実際に彼やその周囲の意見によって、その後参加者数は増加し、ギャル神輿や布団神輿も行なわれるようになった。

また、参加者に関しては上記に留まらず、2003年の渡御祭に国際交流協会の外国人が見学に訪れるということがあり、彼らも参加したいということが分かると、翌年からはその外国人も神輿渡御に参加するようになった。このことについてN氏が言うには、

「もの凄い反対しよったんですよ、宮司が。それを、帰りだけぐらいちちょっと担がせてやれよ200mぐらい、って言うたら、もういいですよって。作ってしまえば、(参加を) 今年やろ言うたら、始めアカンて言ってたんです、2、3人や言うねん。そんなんいうたら、(神輿の) お付が30人で、担ぐの(外国人) が2、3人や。そんなバカな言うてん。(国際交流協会に) 10人とか募集したら12人ぐらい来るんですよ、面白いから。そしたら後騒いで、外人さんが3・3・7 拍子打つだなんてね」

といったように、とてもオープンなかたちにまつりを持っていこうという考えが、よく伺える。神社の神事、まつりの持つ宗教的な価値観もさることながら、それに参加する人々がまつりを楽しめるようにしたい、というのがN氏の持つ最大の価値観なのであろうことが分かった。

が、どうしてこのN氏の考えや地域・参加者の意見が、ここまでまつりの運営に影響を持つことができるのであろうか。それを可能にし

ているのが、彼の所属する「西宮まつり実行委員会」というものの存在なのである。

「西宮まつり」と渡御祭の運営や進行については、原則西宮神社がとり行なうことになっている。渡御の行列における順番や、「海渡御」での巡行経路などに関することは全て古来の渡御祭と同様に行なえるよう、神社が管理している。しかし、それ以外の点、特に参加者の集め方や構成に関しては、実行委員にそのほとんどが委ねられている。N氏に言わせると、この「西宮まつり」は、神社と実行委員会という2本の柱によって支えられていることになるのだという。

そのため、本来の神事に関わらない部分に関しては、神社よりも実行委員の裁量によることが多く、前述したような参加者の多様化が実現しているのである。ただし、外国人による神輿担ぎは例外として、その他、ギャル神輿や布団神輿などに関して神社側は「神事ではない」、あくまでも神事に付随する「賑わい」である、ということになるのだという。

次に問題となったのが、「海渡御」の復活による時間的な制約である。2000年から「海渡御」は復活したのであるが、そのためにかえて地域と「西宮まつり」の間に溝ができたということを、神社や実行委員らが最近になって感じるという。それというのも、以前は、1年に1地域だけとはいえ、「陸渡御」で氏子地域内を神輿と行列が巡行していたものを、「海渡御」を行なう日程上の都合から、中央商店街の中を一部巡行するだけのものとせざるを得なくなったからだ。まつりを行なう上で、本来の姿に再興してやるのは悲願のようなものであっただろうが、現代社会においてまつり、特に渡御祭を行なえるのは1日程度のことであるから、このような問題が起こることは致し方ないこととも言える。

その解決策として、2006年からは各氏子地域にも「陸渡御」を行なうようになってはいるが、それよりも前にこの「西宮まつり」と地域を結びつけようと活動していたのが、若戎会であり、彼らのだんじりによって、地域とまつりの溝は埋められていたといっても過言ではない。彼らの「西宮まつり」における活動を見ることで、この「西宮まつり」における神輿とだんじりの2面性を考えていけるのではないかと思う。

若戎会がこのまつりに初参加したのは震災以前の1970年である。この時、彼らはだんじりを自分たちの手で作り、この「西宮まつり」をはじめとした神事や、あるいは市内外の様々な行事に参加していくことになった。

西宮神社には、昔からだんじりが存在していなかった。まつりを盛り上げるため、また自分たちがまつりに参加して楽しむために、だんじりを作ったという。そして、氏子組織としてまつりの活動をしていくには本格的なだんじりが必要であるとして、西宮神社にだんじりの購入を要求するまでになった。結果1986年、泉大津市から、中古の「岸和田のだんじり」を神社に購入してもらい、以後の活動を行なっている。

そうした流れでだんじりは、「西宮まつり」の期間中に、地域を巡行するということで参加をしており、2005年には4つの氏子地域のそれぞれ一部を回る順路で、氏子地域にまつりをもたらしている。前述したように、神輿巡行を地域に戻そうという動きはあるものの、例えば以前同様に地域を回ったとしても、渡御祭では4年に1度しか機会は巡ってこない。また、陸渡御は運営の性質上から、地域といってもその一部を回るだけになってしまう。

このような中で、渡御祭におけるだんじりの巡行が担っていることは、単にまつりを盛り上げることや、祭礼において重要となる見物人の呼び込みなどととどまらず、まつり行事の根底である地域との関わりそのものである。

1日だけの神輿渡御と比べ、だんじり巡行を3日間行っている姿は一見、宇野の研究〔宇野 2005〕で挙げられた、行事を延長させる「日延べ」に近いものとして捉えられるかもしれない。しかし、祭礼の期間に収まっており、なおかつ自分たちが楽しんでいる以上に地域と祭礼のためとなっている点が、この「西宮まつり」におけるだんじりの特徴であるといえる。

このようなだんじりだけではなく、渡御祭本体にも地域と結びつきが必要であるという考えの元に、童女神楽をしたり「陸渡御」のコースを以前の地域を巡行するというスタイルに近づけようとしたりといった動きもある。このようなまつりの変化と、それに伴うまつり全体の問題点や可能性について考え、神社が地域に対してどのように接しているかも検討したい。

まずは、それぞれ解決策として出されているものを見ていこう。地域への神輿巡行は、2006年に再開されたので、震災後としては2006年の用海地区での巡行が本稿では唯一の事例となる。経路については図3にある通りであるが、距離としてはほんのわずかなものである。交通事情と御輿担ぎの負担が問題となっているため仕方はないが、参加者としては「これだけ?」というのが主な感想であり、実際私もそう感じていた。とはいえ、「地域でやるようになってよかった」という用海地域からの意見もあるので、今のところはこういったかたちでも良いようではある。

流れを見ると、日本盛社の内部で御旅所祭が行われ、同時に昼食をとり、その後新西宮浜に移動して海渡御となるスケジュールである。この変化によって、ヨットハーバー内にて祭事をとり行わなくなり、時間の短縮には繋がっている。海渡御は、復興当初から時間がかかりすぎていると参加者から言われていた背景があるので、そういったことに対する配慮にもなっているのである。

また童女神楽は、前述のように2005年から始められた。元々は、御旅所祭において巫女が神楽を行っていたものを、地域の子小学生に役割を交代したかたちになっている。その年に巡行する地域の小学生が担当するので、2005年はまだ西宮中央商店街を回るだけであつたから浜脇小学校となったが、翌年には用海地区の巡行となったため、用海小学校の女生徒も舞うことになった。

ここでもきっかけとなったのは、先ほどもあった、子どもにも参加してもらいたいという、N氏ら実行委員の考えである。この童女神楽もギャル神輿などと同様に、渡御祭ではあくまでも賑わいである。しかし、「西宮まつり」における渡御に参加していること自体に意味があり、地域や市民のまつりとして受け入れられる基盤となっていくのではないかと考えられる。

ただ、渡御祭における問題点として、参加者の人数が増えすぎているという実態が存在している。まつりが終わった後での直会において、会場となる西宮神社会館2階の宴会場に参加者らが入りきらないということが起き、現在では廊下にまではみ出して、どうにか参加者全員がイスについて

いる状態である。

これを受けて、大手前大学などはあまり参加者が増えすぎないように調整をしているものの、全体としては参加者が増加する傾向にあり、依然解決する見込みは見えていない。西宮神社としては、「場所が狭いのであれば、対策を検討する」とのことであるが、祭事の締めとして参加者とどのように向き合っていくのであろうか。

また、同様のこととして運営費などにも問題が生じてきているという。現在の「西宮まつり」を運営する費用の約3/4は、地域の企業や個人からの寄付と西宮神社の経費によって賄っているが、残りの1/4は赤字になっているというのだ。そのため、渡御祭での昼食がやや変わったり、直会で振る舞われる料理や酒にも反映したりするなど、場所だけの問題でもないことになりつつある。

N氏が言うように、神輿の担ぎ手などで参加者を増やす必要性はあり、また1度参加した人々がリピーターとなってさらなる参加者を生む可能性はある。事実、現在では地域外からも友人や知人といった関係で参加する人は少なくない。このような状況下で、いかに上記の問題点に対しコントロールできるかが、問われている。

震災という契機によって、海渡御が復活するなど「西宮まつり」と渡御祭は大きな復活を遂げた。が、今後の発展については西宮神社と「西宮まつり実行委員会」、そして参加者や地域もさることながら、祭礼という見地からは見物人らとの関係において、どのような変化を見せていくのであろうか。

#### IV. 考察

本稿で見てきた「西宮まつり」と災害からの復興は、災害によって特定の行事が出来なくなったから代わりに別の行事をしたり、ある要素が増減したから行事の内容を変えたりするという類の変化をした事例ではなく、災害による復興を契機として、以前から途絶えていた古来のまつりを2度に渡って再興させていった事例である。



戦後復興では、はるか昔から今まで存在も知られていなかった渡御祭を、陸上の神輿だけではあるが復活させた。そして、それに合わせて地域住民の方から「西宮中央市民まつり」を催し、参加することで盛り上げていこうという機運が存在した。それがやがては、若戎会がだんじりを作り参加するようになるまで発展していき、「西宮えびすまつり」という祭礼を確立させていったのだ。

また震災復興においては、「海渡御」を再興し、まつりを古来の姿そのものに復元させた。同時に、参加者の数と層を増すことになり、ギャル神輿の登場や外国人の参加を生むことになった。加えて、震災以前と神輿の経路が異なることになると、それによって地域との関係を希薄化させないために、童女神楽を催したり、地域への巡行を再開させたりという細かな変化も辿った。

## 1. 「西宮まつり」発展の背景

「西宮まつり」においては、祭礼の復興という契機を生かし、神社から地域に、あるいは地域から神社に歩み寄ろうとしている過程が存在している。

最近の「西宮まつり」では、祭事として必要な神輿の人員を集め、さらに増やしていくに至っているし、地域でまつりを行ないたいという実行委員や地域住民からの要望通りにコトが運んでいる。「西宮まつり」は震災後の復興という大きなプロセスを、成功させたと言ってもいいであろう。

ではなぜ、この「西宮まつり」は成功するに至ったのか。それには大きく分けて3つの理由が存在している。その1つが、「西宮まつり」全体を支えている西宮神社の経営基盤である。

西宮神社が他の神社と異なる特徴として、多くの神社でとられているような、氏子地域からの寄付に頼った経営がなされているわけではない、という点がある。この西宮神社の経営の元となっているのは、十日戎による収益と、地元の酒造会社を始めとする企業からの寄付や協賛であるという。十日戎では前述したように3億円にも上る収益が存在しており、地元企業からの寄付などは明らかではないが、まつりの最中に掲げられる幟の数を

見れば（写真12）、相当な金額であると考えられるであろう。

このような金銭的余裕によって、西宮神社は他の地域や神社よりも強い経営基盤を持っており、そのことがまつりを成功させる要因となっていると考えられるのである。

事実、西宮神社によれば、「西宮まつり」の運営費というのは約半数が協賛者・企業による寄付で、西宮神社の経費から出されるものがおよそ1/4にあたるという。そして、残りの1/4に関しては赤字となっており、西宮神社によってどうにか穴埋めしている実情であるともいう。それを裏付けるように、戦後の渡御祭復興から数年後に始められた「西宮えびすまつり」は、震災後に西宮神社の経営が傾いたことで渡御祭が行なわれなかった時期には行なわれず、まつり全体が沈静化していた。

そして、2つ目の理由となっているものが、「西宮まつり実行委員会」、あるいはその実行委員としてオープンな考えと構想をもたらしているN氏の存在である。

「西宮まつり実行委員会」が設立されたことによって、西宮神社と実行委員会という2本柱で運営が行なわれるようになった。これで、全体の運営を神社が引き受けることで、まつりの運営に大きな経営基盤を確保した上で、実行委員会が参加者募集と企画を担い実行できる、という体制が整うことになったのである。

これによって、神事の本義ではないようなまつりの要素を比較的自由に取り込むことが可能になり、参加者を増やすことに繋がったと考えられる。神輿の担ぎ手が増えることで「陸渡御」は比較的スムーズになり、布団御輿が復活し、ギャル神輿の登場によって本来まつりに参加できなかった女性を引き付けることになったのである。

また、震災復興当初の「西宮まつり」においては、西宮神社と地域との関わりが薄れていくことが見受けられたが、実行委員会が参加者や巡行経路などを計画していくことで、地域との関係を希薄化させないような変革を行なっていた。

3つ目の理由としていえるのが、西宮神社内部の世代交代<sup>16)</sup>である。戦後復興と震災復興のどちらにおいても、当初は西宮神社の伝統を引き継

いだ世代が行うことで、まつりの基礎を築いてきた。しかし、まつりが始められた後に世代が交代することによって、神社の考え方が変化し、まつりそのものも変化し易い状態になっていたと考えられるのである。

これは、たまたま「西宮まつり」と渡御祭の復興が神社の世代交代の時期と重なっていたということであるが、震災後の2004年にN氏が外国人の参加を求めた場合などを見ても、考慮すべき点ではないだろうか。

## 2. 「西宮まつり」と地域性

「西宮まつり」には他の地域における祭礼と異なる点が存在している。祭礼で前提となるのが「見られる」ことであるが、これはつまり「見られる」ためにまつりを行なう必要がある、ということである。そのために、祭礼を行なう者や参加する人々はまつりの様式を維持したり、あるいは発展させたりするため、エネルギーを費やしている。近年ではそれが、本義であるはずの神社の神事から外れたり、あるいは経営的な面で変更・縮小などに至ったりすることに繋がっている事例がある。

しかし、「西宮まつり」という祭礼では、「見られる」ことよりも地域のまつりとして行なわれることに目が向けられている。そしてなにより、その発展する中で一定の運営水準を保ち、西宮神社の渡御祭が常に中心として立っている。

これは上述したように、「西宮まつり」が西宮神社の主導によって行なわれていることに因るが、地域のまつりになっていくには、もう1つの要因が絡んでもいる。それが西宮神社と氏子の関係、ひいては氏子らの意識によるものである。

西宮神社の経営は上で見た通りであるが、その前提となっている「氏子からの寄付に頼らない」という点が、氏子との関係を希薄なものにしてきていた。私はそれらを元に、卒論では「西宮の氏子地域の人々は、多くが氏子意識ではなく地域意識としてまつりに参加している」とした。「実行委員会」を立ち上げることには、こうした地域の人々の意識を前提として、まつりに参加する人員を集めるための必要性があった。

つまり、西宮神社の氏子である意識が低いことで、まつり自体に「神社

の神事」という厳格なイメージを持つことなく、単なる「おまつり」というムードになり、逆にこの「西宮まつり」に参加者を増やし、地域のまつりへとになっていったのではないだろうか。このことによって、「西宮まつり」は確かに発展しているものの、その方向性を見誤ることにはなりたくないのではないかと考えられる。

## まとめ

西宮神社という、都市の経済や民間信仰にとって重要な位置にあるが、歴史的な背景を多く持つことで他とは異なる周辺との関係を築いていった神社の祭事、渡御祭の歴史を追ってきた。これで、災害復興というターニングポイントを利用した祭礼の復活する様を描くことができたのではないであろうか。

同時に、「西宮まつり」の特異性である「神社主導であり、参加する氏子に氏子という意識がなく、他のまつりと比べて地域が積極的になって行なわれていない」という、私の持っていた疑問点についても、明らかになったように感じられる。「西宮まつり」は、西宮神社を中心とし、神社と地域の相互関係によって成り立ち、双方の関係性を強める場として作用していたのである。

しかし、本稿ではまつりにおける西宮神社と参加者の関係に焦点を当てたため、震災後の「海渡御」についてはほとんど説明をしないまま終えることになった。「海渡御」はまつりの重要な要素ではあるが、これまで見てきたように、まつり全体の運営、特に「海渡御」の船や順路は神社が仕切り、参加者はただ船に乗るだけの状態であることから大幅に割愛した。この点についてはご了承頂きたい。

神社の神事が中心になっているという背景を持ちつつも、地域の人々は宗教を求めず、地域のまつりであることを望んでいる。そして、古来の伝統があるとはいえ、近年では戦後からしか歴史が存在せず、あまり知られた祭礼ではない。「西宮まつり」と渡御祭は、震災復興後に「海渡御」が復活した時点で古来の姿を完全に復興させたが、都市の祭礼として今後ど

のような発展をしていくのであろうか、期待したい。

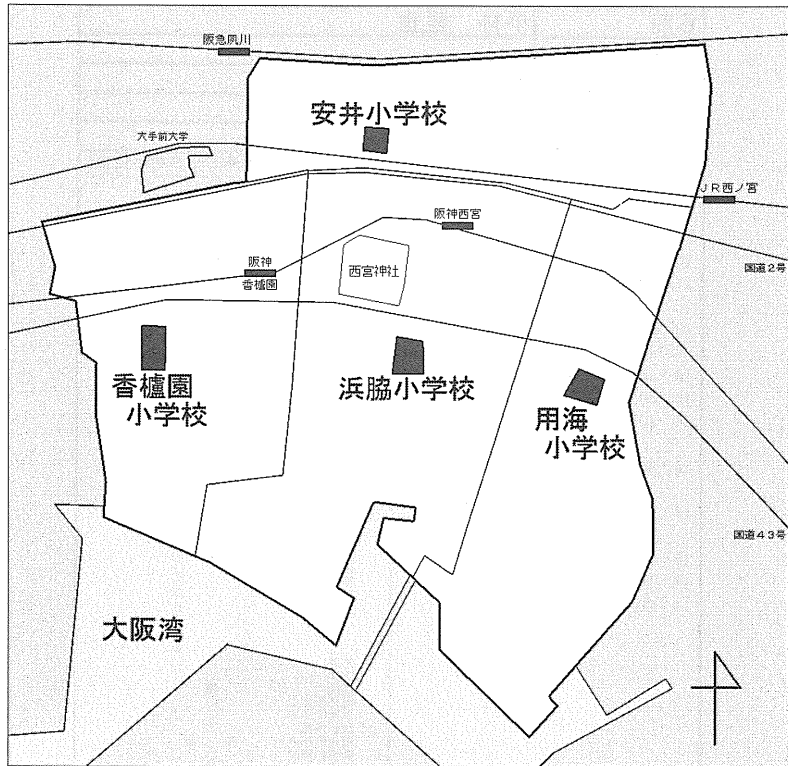


図1. 氏子地域図

(昭文社『都市地図 兵庫県 5 西宮市』2004年版をもとに作成)

行列奉仕		
名前	小林 哲也	
所役		
執物名	社名旗	
装束名	白丁	
船名	1 番船	第11鉄丸
本日の予定	行列位置 (赤印の所が行列時の位置)	
09:50 拝殿集合	御輿指擧	○
10:00 発興祭	布団御輿奉昇者	御 輿
10:35 拝殿を出発	女子御輿奉昇者	○
10:55 車渡御神社出発	御先太鼓	○
11:30 陸渡御 (浜戎公園～日本盛本社)	先祓	○
12:10 お旅所祭 (日本盛本社)	白杖	○
12:40 食事休憩	社名旗	○
13:20 お旅所を出発	渡御委員長	○
13:50 ヨットハーバー到着	氏子奉幣者	○
14:10 還御 船渡御出発	猿田彦	○
かざまつり	祭員	○
15:40 船渡御到着	五色旗	○
還御	青黄赤白黒	○
16:00 ヨットハーバー出発	錦旗	○
	伶人	○
16:40 本社到着	童女	○
16:50 還御祭	金幣	○
17:20 直会	銀幣	○
	御指	○
	御矛	○
	御弓矢	○
	御太刀	○
	八乙女	○
	紫簾	○
	隨身	○
	副番主	○
	鳴尾惣太夫	○
	御輿供奉者	○
	御輿指擧	○
	御輿奉昇者	○
	御輿供奉者	○
	斎主	○
	童男	○
	童女	○
	西宮神社旗	○
	産宮参供奉者	○
	唐櫃	○
	産宮参供奉者	○
	産宮参り旗	○
	各町代表	○

\* 巡行に時間の余裕がございませんので短時間での昼食等ご了承願います  
 \* 巡行中、沿道の人等と話しながらの巡行はご遠慮願います

図 2. 渡御祭の日程と行列構成 (2006年 9 月23日)

	西宮市	西宮神社（主に渡御祭）
1924	甲子園球場開場。	
1925	西宮町が西宮市になる。	
1927	阪神国道電車が開通。	
1937	西宮球場開場。	
1945		8月の空爆で本殿他境内のほぼ全てが焼失する。
1947		神社本庁設立による新規則から、宮司に吉井良晃、禰宜に吉井良尚が任命される。
1951	鳴尾・山口・塩瀬村を合併。	
1952		宮司吉井良晃死去、吉井良尚が後任。
1954		神輿と行列による「陸渡御」が再興される。
1961		本殿の復興が完了する。
1962		渡御祭を車による巡行にする（1986年まで）。
1963	国道43号（旧国道）が開通。	氏子青年団 若戎会 発足。
1966	大手前女子大学が開学。	
1970		若戎会の自作しただんじりが参加。
1973	第1回西宮市民まつり開催。	
1981		「陸渡御」を含め2日間が「西宮中央市民まつり」となる。
1986		「西宮えびすまつり」に改名される。若戎会の要望により泉大津市千原町からだんじりを購入する。
1987		陸渡御を徒歩による巡行に戻す。
1988	第1回西宮市民花火大会開催（震災以降中止）。	「宮水まつり」が22日に行なわれるようになる。
1995	阪神淡路大震災。	阪神淡路大震災により、渡御祭とまつりが中止される。
1997		「宮水まつり」が「西宮酒ぐらルネサンス」に移行する。
2000	大手前大学が共学化。	「西宮まつり」として復興、「海渡御」も再興される。
2001		大手前大学らが参加。
2002	西宮球場閉鎖。	筆者（小林）が初参加する。 和田岬までの「産宮参り」がとり行なわれる。
2003		中央商店街が工事のため、「陸渡御」を境内でのみ行なう。
2004		渡御祭に、国際交流協会を通し外国人の参加が始まる。 宮司に吉井良昭が就任、以下権宮司・禰宜も世代交代をする。
2005		「陸渡御」のお旅所祭に童女神楽が登場し、行列のにぎわしとしてギャル神輿が加わる。
2006		「陸渡御」で氏子地域への巡行が復活する。

表 1. 西宮まつりと西宮神社・西宮市の略年表







写真 1. 大手前丸  
(村瀬教授撮影、2004.9.23、新西宮浜)



写真 2. 著者  
(友人撮影、2005.9.23、西宮神社境内)



写真 3. 童女神楽  
(友人撮影、2005.9.23、新西宮浜)



写真 4. 用海地域  
(村瀬教授撮影、2006.9.23、  
日本盛社前)



写真 5. ギャル神輿  
(友人撮影、2005.9.23、  
西宮中央商店街)

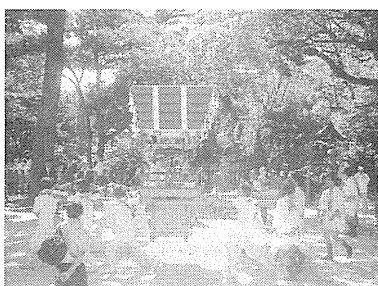


写真 6. 布団神輿  
(毛利講師撮影、2006.9.23、  
西宮神社境内)

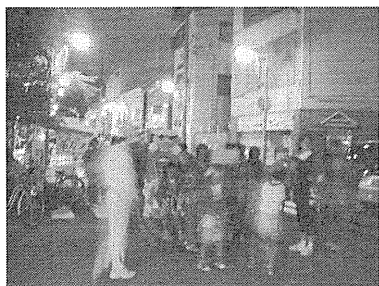


写真 7. 宵宮まつり  
(著者撮影、2005.9.22、  
西宮中央商店街)



写真 8. 若戎会のだんじり  
(友人撮影、2005.9.23、西宮市内)

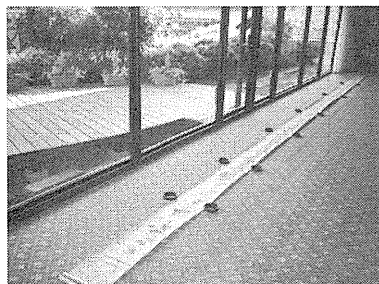


写真 9. 『和田崎神幸之図』  
(吉井貞俊氏撮影)

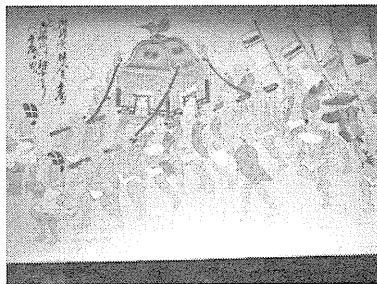


写真10. 絵巻での陸渡御先頭部  
(吉井貞俊氏撮影)

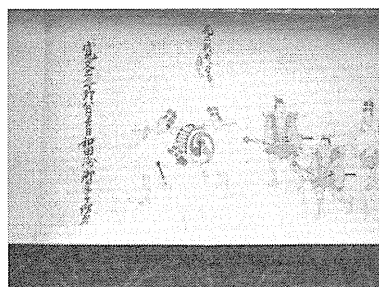


写真11. 絵巻での神輿巡行部  
(吉井貞俊氏撮影)



写真12. 当日の幟  
(著者撮影、2005.9.21、西宮神社南門)

注)

- 1) 大手前大学に在学していた2002年から。卒論では、主にこの「西宮まつり」に参加している氏子らの意識を、帰属意識というテーマによって調査した。結果としては、西宮神社の氏子らには氏子である意識がないという意外な事実を知ることになり、さらにこの西宮神社やその地域に関する興味を引かれることとなった。
- 2) 現在はそれぞれ小学校区となっている（図1）。
- 3) N氏は西宮市の公社に勤務している。
- 4) 現在「灘」といえば神戸市の地名であるが、かつては神戸の生田川から西宮市東端の武庫川までに至る海岸地帯のことであり、その範囲にある酒造地帯は「灘五郷」と呼ばれていた。
- 5) 西宮という名称の由来に関しては、都（平安京）の西にあるとする説と、後述の鎮座伝承から鳴尾の西に行った所、とする説がある〔山下2000：333〕。また大治時代（1126～1130）には戎神社（現在の西宮神社）と南方にある南宮、北の広田神社の3社をまとめて「西宮」とする記述が残っており、「西宮」が西宮神社1社を指すようになるのは後にえびす信仰が広まってからであるという〔西宮神社 2003：25〕。そして、西宮神社という社名が付けられたのは明治に入ってからである。
- 6) 西宮神社から北北東へ2kmの地点にある神社。かつて西宮といえば、この広田神社であったという。祭神は天照大神荒魂。
- 7) 鳴尾は西宮市の南西にある地名。この古伝承の時代では、現在の阪神電車鳴尾駅あたりに海岸線があったとされる。
- 8) 主に関西地方ではえびす神のことを、親しみを込めて「えべっさん」と呼ぶ。
- 9) 西宮神社から東へ約500m行くと、本町6丁目に御興屋（おこしや）跡地という場所があり、「おこしや祭」ではこの地点まで神輿を担ぎ、祭事を行なう。
- 10) 写真9、10、11。（生田神社所蔵。西宮神社前権宮司の吉井貞俊撮影。）
- 11) 西宮神社や夙川周辺の井戸から採れる、酒造りに適した水。西宮の酒造地帯にはなくてはならない存在となっている。
- 12) 現在では、こちらも震災復興という旗のもとに、1997年から始められた「西宮酒ぐらルネサンス」という、近隣の酒造メーカーらと西宮神社との共同による

イベントの方に日程を移している。開催日は10月最初の土・日曜日。

- 13) 兵庫県が平成15年より実施している、県内の小学校区にスポーツクラブを設立するための支援事業。西宮市では体育振興会が役目そのままに、この名称に変更している。
- 14) 米山を座長とする「えびす信仰研究会」が、1999年から2001年の間、西宮神社で開催されていた。現在は甲南大学の「民間信仰研究会」に引き継がれている。
- 15) 直会（なおりい）。神事やまつりに参加した一同がまつりの後に集まって行なう、宴会のようなもの。本来は神事の一環であるが、「西宮まつり」では西宮神社社会館 2Fで酒と料理が振舞われ、宴会、あるいは打ち上げとしか表現しようがない。
- 16) 戦後復興時には、渡御祭再興前の1952年に宮司吉井良晃氏が逝去し、後任として吉井良尚氏が宮司に、吉井良地氏が権宮司に就いた。また、震災後復興では2004年に宮司の吉井良隆氏と権宮司の吉井貞俊氏が退職し、吉井良昭氏が宮司に就いた他、若い世代が要職に就いている。

## 参考文献

荒川裕紀

2004「十日戎開門神事再考－開門神事は「都市の祭り」か－」『文明・宗教・民間信仰』：101-122

上野功一

2005「近代都市祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程－千葉県佐原市新宿の諏訪祭礼を例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』（124）：101-161

小笠原尚宏

2005「山車祭りにおける神輿渡御の変容－佐原市本宿の祇園祭を事例にして」『国立歴史民俗博物館研究報告』（124）：163-181

週刊神社紀行

2003『週刊神社紀行50号－西宮神社・今宮戎神社－』 学習研究社

西宮市

1996『阪神・淡路大震災 西宮の記録』 西宮市

西宮市現代史編集委員会編

2002『西宮現代史－第2巻 政治・行政・財政資料編－』 西宮市役所

2004『西宮現代史－第3巻 社会・教育・経済資料編－』 西宮市役所

2006『西宮現代史－第1巻1 政治・行政・財政通史編－』 西宮市役所

西宮市史編集委員会編

1967『西宮市史 第3巻』 西宮市役所

西宮神社編

1976『西宮神社の研究』 西宮神社社務所

1999『西宮神社震災復興誌』 西宮神社社務所

2003『西宮神社』 学生社

西宮神社復興奉賛会

1962『西宮神社復興造営誌』 西宮神社社務所

松浦和幸

2001「阪神・淡路大震災と北淡町室津八幡神社の秋祭り一祭りの現状とその変化について」『兵庫県立看護大学紀要』 8:127-137

山下忠男

2000『町名の話 西宮の歴史と文化』 西宮商工会議所

吉井貞俊

2003『福の神えびすさんものがたり』 戎光祥出版

吉井良尚

1958「広田・西宮・南宮三社の和田岬神幸に就いて」『神道史研究』6(3):30-40

1974「広田南宮と西宮」『神道史研究』22(5・6):306-325

1999『えびす信仰事典』 戎光祥出版

米山俊直

1983「都市とまつり」『新都市』37(3):11-16

1986『都市と祭りの人類学』 河出書房新社

西宮コミュニティ協会 『宮っ子』

1979「えびすさん鎮座の伝説」 1:2

- 1980「日本晴れの9月21日 盛大に西宮神社宵宮祭り」 13:1  
1982「楽しいふる里づくり 西宮中央市民まつり」 33:1  
1983「西宮中央市民まつり ー楽しいふる里づくりー」 44:1  
1984「楽しい西宮中央市民祭り」 55:4  
1987「西宮えびすまつりですよ」 88:3  
1990「まつりだ! みこしだ えびすまつり」 123:2  
1991「西宮えびす祭りの変遷」 132:2  
1992「ちょっとおすましお稚児さん ー西宮えびすまつりー」 145:1  
1993「祭りだワッショイ 西宮えびすまつり」 156:2  
1994「西宮えびす祭り 9月21日・22日」 167:1  
1997「安井っ子 だんじりに大喜び」 195:3  
2000「西宮まつり 9月21、22、23日」 225:2-3  
2000「第4回 西宮酒ぐらルネサンス」 226:3  
2001「みこしづくりで広がる地域の輪!和! 市民まつり・戎まつりで子どもみこし活躍」 235:2-3  
2002「西宮まつり 今昔」 245:2-3  
2005「西宮まつり 彩りそえた童女神楽」 275:1

#### 新聞記事

- 1995.1.12 「願い切実 1万円札」 朝日新聞  
1996.3.19 「故事の教えで大練堀に硬貨」 朝日新聞  
1998.11.7 「西宮えべっさん“ハイテク社務所”」 読売新聞  
2000.9.24 「400年ぶり復活 西宮神社船渡御」 毎日新聞  
2006.12.15 「大鳥居復興、最期の恩返し」 朝日新聞

#### 参考WEBサイト

西宮神社

[http://www.decca-japan.com/nishinomiya\\_ebisu/](http://www.decca-japan.com/nishinomiya_ebisu/)

西宮神社若戎会

<http://www.wakaebisukai.com/>

西宮市役所

<http://www.nishi.or.jp/>

西宮商工会議所

<http://www.n-cci.or.jp/>

---

## Revival of urban festival

— Transition of Togyo festival in Nishinomiya-Matsuri —

KOBAYASHI Tetsuya